

### 3. 結論

## 本研究で得られた結果

### ーアルバニア語における重叙表現の特質

本論文では、アルバニア語の代名詞による目的語の重叙表現を、単文のレベルで起こるものと補文節（関係節）内部で関係代名詞に対して起こるものに分け、それぞれの統語構造について、文脈や個々の語の意味の関与などを考慮しながら検討した。

アルバニア語の単文における重叙の条件について、形式的には、目的語の文中における位置（特に動詞との位置関係）、また目的語となる名詞の定・不定の区別が関与している。しかしながらこれだけで重叙の傾向を説明することはできず、対象とする文の前（または後）に存在する文脈を分析し、語の意味のつながりを機能主義的にとらえてこそ、はじめて重叙の傾向を正確に示すことができる。

本論文では、アルバニア語の単文における重叙表現は文脈内でむしろ特別な力点を持たない現象であり、目的語を伴う動詞は重叙代名詞を伴ってこそ安定する傾向が見られることを示した。従って本論文では「なぜ重叙するか」でなく「なぜ重叙しないか」をこそ問題にすべきであるという立場をとり、これによって単文における重叙の分類を行った。その結果、重叙を伴わない目的語は文脈内における「有標性」の度がより高くなり、これが重叙の有無に影響しているということを示した。

一方、関係節内では重叙されるものが関係代名詞そのものであること、非屈折型の関係代名詞によって導かれる関係節では重叙の省略がむしろ多いことなどの特徴が見られた。したがって単文の場合とは異なるアプローチを必要としたが、実際の文例を調べることで、重叙が起こらない文例にはそれぞれの節内構造が関与していること、それらを分類することで非重叙の背景がほぼ説明可能であることを示した。また関係節に見られるこうした現象がバルカン諸語の枠に留まらず、多くの言語に普遍的に起こるものであることも指摘した。

最後に、今回の関係節の文例の分類で明らかになったもう一つの点として、当初の予想よりも *i cili* 関係節の使用頻度が低かったということがあげられる。会話における *i cili* の使用頻度が低いのは既に知られていることだ

が、書かれた文章、特に小説や新聞の文面にあっても同じような現象が見られるという事実は、アルバニア語における補文構造全般に従来の見解からのずれが生じている可能性を示しているのではないだろうか。

この点をさらに調べるにあたっては、第一にできる限り現在に近い環境で用いられている方言テキストの網羅的な検討が必要であり、第二に共時的な調査も継続しなければならない。本研究は基本的に現代語の文脈分析に焦点をしばっているため、いずれも序論で概説するに留まった。特に **Buzuku** の文例については、文書の性格上、解読にあたっての困難が別の問題として残っており、全文の検討にはついに及ばなかった。これも含めて今後の研究でさらに掘り下げていくべき課題としたい。